

「第16回夏季パラリンピック東京大会」を観て感じたこと

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



13日間にわたって繰り広げられた「第16回夏季パラリンピック東京大会」。22競技539種目が行われました。多くの感動とともに、医療に携わるものとして改めて考えさせられる大会でした。



“多様性と調和”を目的としたパラリンピックでしたが、まさにそれを実感できた素晴らしい大会でした。観戦しながら、障害者を取り巻く環境、医療人としてなすべきことを考えさせられました。

私が初めてアメリカに行った40年前のことです。助けを借りず、自力で電動車いすを使って移動している人を目にしました。街もバリアフリーで、障害者が自立していることが日常の光景となっていることに、当時の私は非常に衝撃を受けたものです。というのも、そのころの日本では“車いすは誰かが押して動くもの”。加えて、車いすに乗った方が街中に出ることはほとんどなかったからです。国の福祉政策という名のもと、障害者は“弱者”として扱われていました。誰かが助けなくてはいけない人であり、かわいそうな人。いつか障害者が普通に生活できる、そんな時代になればいいなと感じたことを思い出しました。

更に10年後、北海道の障害者施設に1日泊まって生活をともにしたことがあります。彼らは施設の中ではイキイキとしていましたが、施設長の話では、社会に出るとボロボロになって帰ってくるとのことでした。受け入れ側の体制など周囲の理解を含め、簡単な問題ではないことを痛感したものです。



1964年の「東京オリンピック・パラリンピック」において、海外パラリンピック選手の就業率が49%だったのに対し、日本人選手はほぼゼロでした。これはいかに日本の障害者が弱者として扱われてきたかを表していると思います。この課題対策の一つとして、1976年に「障害者雇用促進法」が改正されました。障害を持った人が、より社会に出られるよう環境が整い始めたのです。

そこで立ち上がったのがヤマトホールディングスの小倉昌男さん。彼は後半の人生を福祉に捧げました。福祉業界ではタブー視されがちな金銭面にも言及し、福祉にも経営が必要だと信念を貫いた人です。障害者を理由にした低賃金労働を許さず、お金を成功につながる道具としました。結果、施設を始めとした福祉業界は変化し、障害者が社会に出るようになったと思います。

「福祉」は幸せを意味しますが、私は“その人がその人らしく輝いて生きる”ことだと考えます。



今回のパラリンピックでは、日本の障害者を取り巻く環境・意識が変わったことを感じました。選手は自身の障害を隠していません。人は注目されることによってさらに輝くことができます。閉会式での橋本聖子会長のスピーチにもあったように、障害をバネに、自分で限界を作らずチャレンジする姿には本当に心を打たれました。



ただし、彼らが健常者のように生活を送るには、何らかの“助け”が必要です。たとえば義手・義足、車いすのような“モノの助け”、加えてガイドランナーなど“人の助け”が欠かせません。



我々医療人は、患者さんや要介護者に対して、その“助け”となる存在でなくてはならない。身体機能を助けるだけでなく、心も含めて助ける役割——患者さんたちが自らの限界を作らないよう、我々がガイドランナーとして引っ張っていくのです。



人間は自分が満たされているときは弱者を救えますが、悲しいことに余裕がなければ弱者にあたってしまうもの。その結果、子どもや親虐待が生まれてしまいます。ここで重要なことは、人間の奥にある本性を理解し、どう防ぐかです。そのためにはまず自分たちの心が豊かになること。同時に“弱者”として扱わない対等な関係性を持つことが重要です。

健育会では患者さんへの「約束とお願い」として、医療もサービス業であることを明確にし、そのためにはお互いに「権利と義務を尊重すること」を大切に考えています

今回のパラリンピックでは、障害者と健常者が調和した大会でした。また人間の可能性は無限です。健育会でも日々真摯に業務に励みながら「ミラクル賞」を生み出していきましょう。

また本大会開催に際して、我々日本国民として得るものはありましたが、代償も払いました。残念ながら新型コロナウイルス感染者が増えたのは間違いありません。その代償に対し、我々医療人は社会貢献しなくてはならない。その点を重視し、健育会では今後積極的にさまざまな取り組みに挑みます。